

学 内 広 報

2003. 11. 26
東京大学広報委員会

秋の紫綬褒章受章者、記者会見行われる



紫綬褒章受章者

(2 ページに関連記事)

目 次

特別記事	2	教育学研究科・教育学部留学生見学旅行実施される、「先端研フォーラム」ホテル・オークラにて開催し大賑わい
秋の紫綬褒章受章者、記者会見行われる		
一般ニュース	5	掲示版
日瑞大学長合同セミナー開催される、第2回東大ホームカミングデー開催される、第28回東京大学伊豆・戸田国際マラソン大会が開催される		第2回東京香港文学研究会講演会のお知らせ、第25回東京大学農学部公開セミナー科学と市民による生物多様性と生態系の再生、第11回身体運動科学シンポジウム、第12回原子力研究総合センターシンポジウム開催のお知らせ、東京大学生物生産工学センター国際シンポジウム 「Future Directions for Plant Biotechnology and Environmental Microbiology」
部局ニュース	8	広報委員会 (東京大学の法人化に関するQ&A) … 14
医学部解剖体慰霊祭が行われる、大学院人文社会系研究科・文学部で外国人留学生見学旅行を実施、大学院理学系研究科・理学部留学生見学旅行、生物多様性・生態系再生モンゴル研究拠点が開設される、大学院		淡青評論 「「問い合わせ」の問題」 …… 16

≡ 特別記事 ≡

秋の紫綬褒章受章者、記者会見行われる

大学院経済学研究科石井寛治名誉教授、大学院農学生命科学研究科見上彪名誉教授、大学院工学系研究科藤嶋昭名誉教授、医科学研究所榊佳之教授、大学院理学系研究科岩澤康裕教授、大学院工学系研究科十倉好紀教授の6名が本年秋の紫綬褒章を受章されることになり、受章記者会見が、10月31日（金）に行われた。（藤嶋昭名誉教授は所用のため欠席）

石井寛治名誉教授
（現 東京経済大学教授）

石井先生は、近代日本経済史の研究分野で、実証的にも理論的にも顕著な研究成果をあげ、日本における経済史研究の水準を格段に高めるとともに、その発展に貢献されてきた。その主要な研究成果は、『日本蚕糸業史分析』（1972）、『近代日本とイギリス資本』（1984）、『近代日本金融史序説』（1999）にまとめられている。

このうち、第1は、輸出産業としてイタリアや中国と激しい競争を演じつつ拡大した近代日本蚕糸業の発展構造を、日本産業革命の一環として実証的に究明し、それを通して産業革命期の日本資本主義の全体像を提示したものであり、その産業革命論は、現在の通説となっている。

第2は、幕末維新期の対外関係に関して当時東アジア最大の貿易商社ジャーディン・マセソン商会の活動について同社経営文書を用いて詳細に明らかにしたもので、これによりこの時期の「外圧」の実態を初めて解明し、幕末維新期の日本の近代化過程に新たな歴史像を提示した。

第3は、日本銀行・横浜正金銀行などにより政策的に展開される産業金融の役割に注目して、その具体像を立体的に示すとともに、これを通して近代日本の特有の金融構造を明らかにしたものである。

いずれも、日本の経済発展の持つ構造的な特質に着目した研究で、現在の経済史研究の基礎を築いたものと評価されており、この間、一貫して日本経済史研究において指導的な役割を果たしてきた。

（大学院経済学研究科 武田晴人）



石井寛治名誉教授

見上彪名誉教授
(現 内閣府食品安全委員会委員)

見上先生は獣医ウイルス学の分野、特に鶏のマレック病ウイルスの基礎的研究で、疫学、病理発生、免疫およびワクチンの作用機序解明のために総合的な研究を行われ、多くの研究業績を挙げられた。

また先生は、マレック病ウイルスの研究にとどまらず、各種動物疾病の病因である鶏のニューカッスル病ウイルス、インフルエンザウイルス、猫の免疫不全ウイルス、白血病ウイルス、ヘルペスウイルス1型、カリシウイルス、スプーマウイルス、犬のヘルペスウイルス、ジステンパーウイルス、バルボウイルス、牛の白血病ウイルス、牛痘ウイルス、馬のヘルペスウイルス4型、羊のオルフウイルス、ミンクの腸炎ウイルス、魚のヘルペスウイルスなど、数多くのウイルスを対象として、ウイルス学、分子生物学、生化学、免疫学等の広範囲にわたる研究を後進と共に行い、優れた業績を挙げられた。これらの研究成果は、動物ウイルスの潜伏・持続感染、発症機構や動物ウイルスによる免疫不全症誘発機序および神経病原性等、宿主寄生体関係の解明に重要な知見を与えている。

最近では新しい型のワクチンとして、ヘルペスウイルスベクターを用いた組換えワクチンの基礎開発研究に先駆的成果を挙げ、各種動物の微生物感染症に対するワクチン開発分野で世界の一つの研究中心となっている。また、世界に先駆けてマレック病ウイルス2型ゲノムのほぼ全域(98%)の塩基配列の決定も行なわれるなど、数々の業績を挙げられ、動物ウイルス学の進展に多大な貢献をされた。

(大学院農学生命科学研究科 明石博臣)



見上彪名誉教授

藤嶋昭名誉教授
(現 財団法人神奈川科学技術アカデミー理事長)

藤嶋先生は独自の発想に基づいて光照射下の界面における化学反応に関して数多くの先駆的な業績をあげられ、「光機能界面化学」という新しい分野の開拓と発展に貢献されました。

1960年代に酸化チタン電極を用いて行った半導体光電極反応(いわゆる本多・藤嶋効果)は、その後、光触媒反応や色素増感太陽電池など、現在世界的に活発な研究が実施されている分野につながっています。特に酸化チタン光触媒に関しては、すでに実用化が進んでいます。基礎研究から応用研究にいたるまで、ほとんどすべて藤嶋先生の研究成果によるといっても過言ではありません。すなわち先生は1990年代に入り、太陽光や室内光に含まれる微弱な紫外光を利用した、光活性の高い光触媒薄膜コーティング材料を提案されました。この提案を基に現在、産業界において光触媒反応を利用した、抗菌、セルフクリーニング、空気浄化材料、新機能建材などの実用展開が進められています。

さらに藤嶋先生は、光化学と電気化学を組み合わせることにより、数々の新規光電気化学材料を開発され、新しい領域を切り開かれました。また、光界面の基礎的理解において、その半導体表面をその場観測する様々な光界面の実験手法を開発され、それらを駆使して様々な光界面反応場の観察にも成功されました。これらの分野においても内外で高い評価を受けています。

(先端科学技術研究センター 橋本和仁)



藤嶋昭名誉教授

榊佳之医科学研究所ヒトゲノム解析センター教授

今回の榊教授の受章は、生命科学のアポロ計画と呼ばれるヒトゲノム計画の中心メンバーとして21番染色体をはじめとするヒトゲノム全解読の成功による、21世紀の生命科学の基盤の構築への多大なる貢献に対して贈られたものです。

榊教授は、ゲノムの構造と機能を分子生物学的手法により解析するという方法論を用いて、霊長類ゲノム中のレトロトランスポゾン型反復配列、ヒト疾患である家族性アミロイドーシスとアルツハイマー病の原因遺伝子を次々に同定し、発症メカニズムを明らかにしました。さらに、生物を理解するためには、そのゲノム構造の決定が必須であるという立場から、ヒトゲノム解析計画の立案や、国際コンソーシアムの組織化に主要な役割を担いました。そして、大量の塩基配列の迅速な決定法や、それらの配列データの解析法等を確立することでヒト21番染色体の全構造を決定し、この染色体上に、ルーゲーリック病の原因遺伝子であるSODやダウン症の原因遺伝子を含む225個の遺伝子が存在することを明らかにしました。日本のゲノム計画のリーダーとして、ヒトゲノムの概要版配列並びに完全配列の決定を主導し、遺伝子構造全体からヒトの生物学を構築する道を開きました。国際的にもHUGO (Human Genome Organization) の副会長、会長を歴任する等、ゲノム科学という新しい学問分野の確立と発展、及び国際的な推進に対する高い功績が認められています。

(医科学研究所 程 肇)



榊佳之教授

岩澤康裕大学院理学系研究科教授

岩澤教授のご研究は触媒化学と表面科学の両分野にわたり、両者を融合した触媒表面科学という新領域を切り開いて多くの先駆的な業績をあげておられます。触媒化学においては、固体触媒の活性構造の変化と反応機構との関連を明らかにするため、有機金属錯体を用いて活性表面（活性構造）を巧妙に分子設計する固定化法を確立しました。広域X線吸収微細構造（EXAFS）法を駆使して表面構造を規定し、さらに触媒反応中のダイナミックな構造変化を捉え、それらを基礎にして触媒反応機構を解明するという、極めて独創性の高い方法論として体系化されました。現在までに200種類以上の新規表面活性構造が設計・合成され、最も精緻な触媒合成法の一つであると世界的に認められております。

これらの研究と並行してEXAFSの測定法の発展にも取り組み、エネルギー分散型の時間分解EXAFSシステムを開発し、解析精度を維持しつつ世界最高の時間分解能を実現して、触媒表面のダイナミック現象の時間分解研究を先導しています。また、偏光全反射蛍光XAFSその場観察装置を開発し、酸化物単結晶表面に分散した金属活性構造の異方性構造解析に世界に先駆けて成功しております。

一方、触媒、電子材料などとして重要でありながら、その表面が複雑で不均一なため、これまで表面科学的研究が困難とされていた金属酸化物表面の研究においても走査トンネル顕微鏡（STM）および非接触原子間力顕微鏡（NC-AFM）を単結晶金属酸化物触媒モデル表面に適用することの有効性を示しました。ルチル型酸化チタン単結晶（110）表面の構成原子像、酸素欠陥像、吸着有機分子像の配向解析および拡散過程のリアルタイム観察に世界に先駆けて成功し、これらを機に世界的にこの表面が酸化物表面研究の標準試料と位置づけられるようになりました。また、高温、気相分子存在下での表面の構造変化や化学反応などの原子像・分子像観察にも初めて成功しています。

以上のように触媒表面科学の開拓者としての岩澤教授の先駆的な功績は国内外で高く評価され、国際的なリーダーとして活躍されております。

(大学院新領域創成科学研究科 佐々木岳彦)



岩澤康裕教授

十倉好紀大学院工学系研究科教授

今回の十倉教授の受章は、物性物理学分野において、強相関電子系の開拓的・系統的研究による高温超伝導体の基本電子相図の解明、電子型高温超伝導体の発見、および巨大磁気抵抗酸化物の発見とその電子論的機構の解明など、世界的にみても傑出した研究業績に対して贈られたものです。

固体の中でクーロン反発力により互いに強く相互作用し合う電子の集団を強相関電子系と呼びますが、十倉教授は、この集団が示す驚くべき現象とその機構を、物理学、化学及び工学的見地からの総合的な研究を通して明かにしてきました。まず、広く知られる高温超伝導体の転移温度が、銅-酸素平面に導入されたホール濃度の関数として理解できることを初めて明かにし、さらに構造的な側面から高温超伝導体の一般則を見出し、自らその指針に基づいて新しい高温超伝導体を設計開発しました。また、この指針に基づき、銅-酸素平面内に従来のホールではなく電子が導入されている電子型超伝導体を発見し、高温超伝導機構の解明に大きく貢献しました。

また、十倉教授は、強相関電子系が示す金属-絶縁体転移（モット転移）の研究を系統的に進め、金属相が従来の金属に見られない異常な振るまいを示すことを実験的に明かにしました。その研究過程で、マンガン酸化物における巨大磁気抵抗効果を見出しました。その後、電子の軌道自由度の重要性をその素励起の観測を通して実証し、スピン・電荷・軌道状態の秩序と揺動に基づく電子論的機構を明らかにしました。さらに、強相関電子系の多様な電子相を制御する手法として、光励起による相転移誘起の可能性をいち早く指摘し実証しました。

以上のように、物性物理学における十倉教授の功績は、大変に大きなものです。

（大学院工学系研究科 鹿野田一司）



十倉好紀教授

≡ 一般ニュース ≡

日瑞大学長合同セミナー開催される

10月22日（水）、本学で開催された日瑞（スウェーデン）大学長合同セミナー参加のため、ウプサラ大学のスンドクビスト学長、カロリンスカ研究大学のヴィクセル学長ほか、スウェーデンの15大学の学長・副学長が来日した。合同セミナーに先立って、一行は10月20日（月）に柏キャンパスを視察した。なお、当日は新領域創成科学研究科設立5周年の式典があり、一行は同研究科並びに学研合同会議のメンバーとの懇談も行った。また翌21日（火）には、在日スウェーデン大使館でリンドストロム大使主催のレセプションが開催され、合同セミナー参加者・関係者が多数出席した。



柏キャンパスの視察

日瑞大学長合同セミナーは法学政治学研究科会議室で行われ、日本側からは結城文部科学審議官、長尾京都大学総長ほか国立、公立、私立併せ15大学の総長・学長及び関係者が出席した。また、主催者である本学の佐々木総長と訪日団の団長であるウプサラ大学のスンドクビスト学長が共同議長を務め、2つのテーマについて討議が行われた。

まず、冒頭に共同議長である佐々木総長とスンドクビスト学長から、合同セミナーの趣旨と日瑞における大学の教育・研究・財政問題の現状が述べられ、結城文部科学審議官から日瑞における高等教育の深化と交流を期待する旨の挨拶があった。

午前中は、テーマ1「大学と社会」について梶山九州大学総長、ヴィクセル・カロリンスカ研究大学学長が主報告を行い、安西慶應義塾大学塾長、ギドルンド・オーレブプロ大学副学長、吉崎北九州大学学長、ビルント・スウェーデン農業科学大学学長がコメントを述べ、これらの報告・コメントに対して、知的所有権の問題、産学連携における学生の参加、大学の地域貢献等について活発な討議が行われた。

午後からは、テーマ2「大学改革と組織」についてマリクソン・ウプサラ大学副学長、石一橋大学学長が主報告

を行い、グスタフソン・チャルマース工科大学副学長（カルヴェマルク・スウェーデン高等教育庁シニア・アドバイザーが代読）、長尾京都大学総長、ハイコラ・ブレッキング工科大学学長がコメントを述べた。これらの報告・コメントに対して、大学改革が日本よりも6年先行したスウェーデンの現状、大学経営への学生参加、新任教員の選出方法、大学教員におけるジェンダーバランス等について活発な討議が行われた。

最後に共同議長として、まず佐々木総長からヴィクセル・カロリンスカ研究大学学長の主報告にあった“A modern university has to navigate to control its own destiny”という言葉を用いし、短期的な問題に対応しつつも、長期的な展望をもって各大学を差異化させたいと、それぞれの大学の存在理由を社会に対して示していくべきであるとの発言があり、スンドクビスト学長からは日瑞両国の大学では、授業料、研究所、学生参加等において異質な点もあるが分権化による多様化やコーディネーション強化が大学改革の鍵となるという点で共通性が高いという発言があった。

このように、本セミナーでの報告、コメント、討議、議長サマリーは、いずれも時宜にかなった内容であり、参加された総長・学長・副学長は今回の合同セミナーが非常に有意義であったことを確認し合い、閉会した。



日瑞大学長合同セミナー会場

第2回 東大ホームカミングデイ開催される

去る11月15日（土）に、東京大学同窓会連合会（会長森亘元総長）主催による「第2回東大ホームカミングデイ」が開催され、卒業生約500名が参加した。

当日は、「午前の部」として、10時から12時までの間、小石川植物園、総合研究博物館、附属図書館、法文1号館25番教室、懐徳館等の学内施設を廻る構内自由見学会が各部局の協力により実施された。

13時から、会場を大講堂に移して「午後の部」の「第一部」として、日吉同連合会代表幹事及び佐々木総長の挨拶があった後、「21世紀の日本と中東の関係ーイラク問題」と題して、大学院総合文化研究科山内昌之教授の講演が行われた。

「第二部」では、現役学生による同窓生歓迎のアトラクションが公演された。まず、音楽部管弦楽団によるベートーベンの交響曲第5番「運命」の演奏、続いて、音楽部コールアカデミーの現役学生にOB合唱団アカデミカコールが加わって、学生歌「足音を高めよ」やウェルナー作曲「野ばら」などが合唱された。その後、運動会応援部による応援歌「闘魂は」、運動会歌「大空と」などのデモンストレーションが催され、最後に運動会応援部のリードにより、参加者全員で本学の応援歌「ただ一つ」を斉唱し、同窓生には若き日を彷彿していただき「午後の部」を終了した。

16時30分からは「懇親会」が第二食堂で催され、懐かしい友人との歓談、OB有志によるエール、寮歌など、それぞれの学生時代に戻り大いに懇親を深めて、ホームカミングデイの1日を閉じた。



講演の様子

第28回東京大学伊豆・戸田国際マラソン大会が開催される

第28回東京大学伊豆・戸田国際マラソン大会が、11月9日（日）開催された。コースは、静岡県西伊豆の東京大学戸田寮（スポーツピア戸田）を基点とする42.195kmで、標高差500mの山道を走るため、通常に比べ難関なコースといわれている。

当日は快晴のもと、総勢105名（教職員6名、卒業生16名、一般参加8名を含む）が参加した。個人の部では、本学卒業生の大井寛己氏が2時間44分36秒のタイムで優勝し、4連覇を果たした。また第2位に卒業生の安達裕司氏、第3位に大学院生の伊藤聖氏が入った。団体の部ではDoo-up桃チームが優勝を飾った。また、ロシア人留学生のヴドヴィチェンコ ゴーヤ ウラジミロフナさん（教養学部文科三類1年）も、好成績で完走した。

地元戸田村では、たくさんの方がランナーを励まし、なかには全選手が走り終わるまで応援してくれた方もいた。

主な成績は以下のとおりである。

第28回東京大学伊豆・戸田国際マラソン大会結果

【個人の部】＜東京大学総長杯＞

順位	氏 名	時 間	備 考
第1位	大井 寛己	2:44:36	卒業生
第2位	安達 裕司	2:53:17	卒業生
第3位	伊藤 聖	3:07:14	農・院生
第4位	中島 徹	3:16:23	農・院生
第5位	林 健太郎	3:17:33	文・院生
第6位	佐々木建昭	3:19:47	工・非常勤講師

【団体の部】＜戸田村村長杯＞（チーム全員の平均順位が少ないチーム）

順 位	チーム名	平均順位	備 考
第1位	Doo-up桃	4.0	
第2位	飛走会A	10.3	
第3位	Doo-up桜	12.3	

【女子の部】＜戸田村体育協会会長杯＞

順 位	氏 名	時 間	備 考
第1位	横山 梓	4:37:12	養・学部生

【学内の部】＜東京大学運動会理事長杯＞

順 位	氏 名	時 間	備 考
第1位	大井 寛己	2:44:36	卒業生

【バカヤロー会長杯】（交通誘導の表示カードに挿入されている押し花を一番最初に見つけた者）

順 位	氏 名	時 間	備 考
第1位	坂上 秀樹	4:57:53	薬・院生



スタート直後の様子



地元の方の声援を受ける選手

（学生部）



≡ 部局ニュース ≡

医学部解剖体慰霊祭が行われる

10月31日（金）14時から、台東区谷中の天王寺において平成15年度医学部解剖体慰霊祭（解剖体数156体）が、ご遺族約210名、医学部関係教職員約40名及びこの春教養学部より進学し、初めて解剖実習に臨んだ医学科3年の学生約100名の合計約350名参列のもとに行われた。

本慰霊祭は、ご遺体を医学教育と医学の進歩発展のために捧げられた方々の御霊に感謝し、お慰めするため、ご遺族をはじめご縁故深い方々のご臨席を得て毎年実施されているものである。

住職以下6名の僧侶による読経が境内に流れた後、廣川学部長による祭文の朗読、焼香が行われ、ご遺族代表、職員総代、来賓代表の焼香と続いた。学生代表として、医学科3年の阿部浩幸さんの焼香に続き、参列者全員が焼香を行った。

本堂における行事を終えた後、千人塚において僧侶による読経が行われ、隣接する医学部納骨堂での焼香を行い散会した。



廣川医学部長による祭文の朗読

（大学院医学系研究科・医学部）

大学院人文社会系研究科・文学部で外国人留学生見学旅行を実施

11月6日（木）・7日（金）の両日、恒例の外国人留学生見学旅行を実施した。参加者は、留学生31人、引率の教職員等12人の合計43人。

8時45分に東大本郷の社会情報研究所前からバス1台を貸し切ったの出発。初日の出発時はあいにくの雨となり、当日の目玉である日本の象徴『富士山』を見学できないと思われる最悪のコンディションであった。バスの中では南アジア・東南アジア歴史社会専門分野主任の桜井教授より富士山及び武田信玄に関する講義があり、留学生達は有意義な日本文化の一面を学習できた。天候をにらみながら予定を急遽変更し、午前中に予定していた

富士山五合目を午後から訪れたところ、「お色直しを終えた女富士」が我々を歓迎してくれた。「富士山」と「雲海」の素晴らしさに留学生達から『歓声』と拍手が沸き上がった。留学生から「留学生旅行に参加して本当に良かった！」との好印象が得られた。



富士山五合目にて

その後宿泊地である石和温泉に到着し、夕食を兼ねた懇親会を行い、安藤国際交流委員を始め参加者全員の自己紹介があり、和やかな雰囲気の中、親睦を深め、楽しい時を過ごした。

翌日は好天に恵まれ、留学生旅行の最大の目的である山梨県立美術館の「ミレーコレクション」及び文学部ならではの見学地「山梨県立文学館」を訪問した。両館のご配慮により、各専門官より運営方針（意義）を含めた貴重なお話を伺いながら、約2時間程度案内していただいた。貴重な日本の文化財を体験する事ができて、留学生旅行の意義を満喫できた。



山梨県立文学館にて

最後の見学地であるマンズワイン勝沼ワイナリーの工場見学を終了し、15時過ぎに帰路についた。週末の金曜日ということもあり、交通渋滞に巻き込まれた関係により、急遽JR新宿駅で留学生の大半を下車させ、バスは予定より1時間遅れの18時に本郷キャンパスに到着。こうして今年の見学旅行は、美しい日本の自然と歴史さらには留学生同士の触れ合いなど、参加者に多くの思い出を残し無事終了した。

（大学院人文社会系研究科・文学部）

大学院理学系研究科・理学部留学生見学旅行

10月19日（日）・20日（月）に大学院理学系研究科・理学部留学生見学旅行が実施された。昨年度行われた初の貸切バスによる箱根へ見学旅行が大変好評だったため、今年も大型バスによる伊豆半島、下賀茂への旅を企画した。

現在、本研究科・学部には20カ国から69名の外国人留学生在籍しているが、今回はその内留学生24名、家族9名、外国人研究員3名、日本人大学院生1名、国際交流室及び大学院掛からスタッフ5名の計42名が参加した。



理学部1号館前から出発

雲一つない秋晴れに恵まれ、バスは伊豆半島を海沿いにひた走る。見渡す限り青い海が目の前に広がり、美しい景色が旅行気分を盛り上げてくれた。皆、写真を撮ったり景色を眺めながら、家族や隣に座っている学生とのおしゃべりがはずんでいたようである。夕刻に宿泊先の東大下賀茂寮到着後、夕食までの自由時間には室内で卓球やビリヤード、近くの露天風呂、散歩、海までサイクリング等、それぞれが思い思いの時間を過ごした。夕食後のレクリエーションでは自己紹介を兼ねてフルーツバスケットを応用したゲームを行ったところ、大盛況で良い運動にもなり、参加者同士の親密度が増したようである。

翌日の午前中は自由行動で、すがすがしい晴天の中、大学院農学生命科学研究科附属演習林樹芸研究所や熱帯植物園を見学したり、弓ヶ浜の浜辺まで自転車、タクシー、そして何と徒歩で出かけるグループもあった。自然溢れる川横の土手の道をのんびりと1時間以上かけて歩いた学生たちは、海までの道々、いろいろ話すことができたようである。海に着くと皆、白い砂浜と美しい海、打ち寄せる波にため息をつき、中には日本で見る初めての海に感動し泳いだ学生もいた。

帰り道ではバスは山側を通り、雪をうっすらと被った富士山と夕日を受けて輝く芦ノ湖も眺めることができ、美しい日本の自然を満喫した旅であった。1泊2日の短い旅行ではあるが10月入学の学生や研究員、子ども連れで参加した留学生の家族も含めて互いに知り合い、また普段研究に忙しい学生たちもほんのひと時ではあるが、温泉や自然の中でリラックスして楽しい時間を過ごすことができたようである。

下賀茂寮では食事や無料貸し自転車等で管理人ご夫妻に温かいお心使いを頂き、お陰様で心地良く滞在することができた。ここに紙面をお借りして感謝申し上げます。



弓ヶ浜にて

（大学院理学系研究科・理学部）



生物多様性・生態系再生モンゴル研究拠点 開設される

10月13日（月）、農学生命科学研究科とモンゴル国立農業大学との間における学術交流に関する協定書の調印と、モンゴル国立農業大学構内に設置された「生物多様性・生態系再生モンゴル研究拠点」の開設を祝う式典が、同研究拠点で催された。

この研究拠点は、21世紀COEプログラム「生物多様性・生態系再生研究拠点」（研究代表者：農学生命科学研究科・鷺谷いづみ教授）の一環として、今後5年間にわたって設置されるものであり、砂漠化・土地荒廃により劣化した半乾燥地域の草原生態系を再生させるための研究教育拠点として活用されることが期待されている。

式典では、アルタンスフ・モンゴル国立農業大学学長が、「21世紀においてモンゴルを持続的に発展させるためには生態系に配慮した経済政策の履行が不可欠であるが、そのためには生物・生態系の生産性を理解し、その保護や賢明な利用を行うための長期的な視野に立った研究が不可欠である」として、本拠点を積極的に支援していく意思を表明した。

式典には、モンゴル国立農業大学の学長、各学部長、関係者が、また本学からは農学生命科学研究科の武内和彦教授が出席したほか、モンゴル農業省、在モンゴル日本大使館、共同通信社からも出席があり、盛会であった。また、式典の様子はモンゴル国内のテレビ、新聞にも報道され、学術交流および研究拠点に対する関心の高さが伺われた。



前列右から研究拠点責任者のウンダルマ講師、本研究科武内教授、アルタンスフ・モンゴル国立農業大学学長

（大学院農学生命科学研究科・農学部）

大学院教育学研究科・教育学部留学生見学旅行 実施される

10月22日（水）に、大学院教育学研究科・教育学部の外国人留学生見学旅行が実施された。本年度は日帰りで、箱根方面へのバス旅行となった。現在、本研究科・学部には11ヶ国、60名の外国人留学生が在籍しているが、その内留学生33名、家族4名、渡部洋研究科長、留学生担当講師ら教官・事務職員13名の計50名が参加した。

大型バス1台で、まず箱根大湧谷へ到着したが、強風で雨脚が強く残念ながらほとんど視界も効かなかった。そして、芦ノ湖へと向かい、湖畔の森の中にある箱根園で昼食をとった後、露天風呂に入るなどして、日本の代表的な国立公園の美しい自然を満喫した。箱根の関所を見学するところには晴れ間も見え始め、美しい山と湖を背景に一同で記念写真におさまった。蒲鉾博物館の見学も楽しんだ。帰途の車内では、留学生が教官や事務職員と競ってカラオケに挑戦し、拍手の鳴り止まない楽しい時間が流れた。

特に事故や病気もなく、夕方には本郷に到着した。留学生にとっては大変思い出に残る貴重な一日となったことであろう。本年は限られた予算での日帰り旅行となったが、留学生から来年はぜひ泊りがけでという声が多く聞かれた。



芦ノ湖にて

（大学院教育学研究科・教育学部）

「先端研フォーラム」ホテル・オークラにて開催し大賑わい

10月30日（木）・31日（金）の両日、虎ノ門ホテルオークラにて「先端研フォーラム」が開催された。本フォーラムは、先端科学技術研究センターが平成13年度より5カ年計画で進めている科学技術振興調整費「戦略的研究拠点育成事業」の中間報告も兼ねており、他大学・関係省庁・企業等の学外の参加者は両日で約1,000名、延べ人数にすると約1,700名という賑わいとなった。

1日目（30日）は、午前中の先端科学技術研究センターにて実施されているオープンスクール等の紹介に引き続き、午後より開催された。佐々木総長の挨拶に引き続き、井村裕夫氏（総合科学技術会議議員）、石川明氏（文部科学省研究振興局長）、生駒俊明氏（一橋大学客員教授・戦略的研究拠点評価委員長）の来賓挨拶、その後、南谷センター長および本センター教官による「戦略的研究拠点育成事業」の概要および現在の進捗状況、また、今後の構想が説明された。また、「国際化への諸問題」と「文理融合の現状と課題」と題する2つのパネル討論が行われた。

2日目（31日）においては、本センター教官と共同研究を実施している企業代表者等が、それぞれペアを組み、両者より技術移転の内容およびこれまでの成果について発表するという、産学連携の色彩の濃い内容であったことから、企業からの参加者が前日にもまして増大し、一層、活気に満ちたものとなった。

また、講演等がおこなわれた主会場以外にも、各研究室のパネル展示・個々の研究者によるワークショップのブースが別に設けられ、同時進行されたが、両日をとおして常時、満席となる賑わいぶりであった。

フォーラム終了後、大学・企業からの資料請求、問い合わせも多く、法人化を控えた大学の制度設計、産学連携の取り組みに対する社会の関心と期待の高さが感じられる催しとなった。



ワークショップ会場に隣接した各研究室のブース

（先端科学技術研究センター）



ワークショップが終日行われた会場内

≡ 掲示板 ≡

第2回東京香港文学研究会講演会のお知らせ

平成13年11月に文学部で第1回研究会を開催してから、早くも2年が過ぎてしまいました。このたび講師に也斯さんをお迎えして、第2回研究会を開催します。也斯さんはグルメと政治の『Foodscape（食景詩）』（その内10篇を文芸誌『ユリイカ』2000年7月号に訳載）などで知られる香港の詩人・小説家で、本名は梁秉鈞、香港・嶺南大学教授として現代中国文学を講じている比較文学者でもあります。本年7月より国際交流基金の招きで東京大学文学部外国人研究員として来日されています。

また最高のコメンテーターにもご登場願います。フランス文学者で『香港映画論』（近刊）を執筆中の野崎敏大学院総合文化研究科助教授です。お誘いあわせてご来場下さい。

日 時：12月12日（金）

14:30 開場

15:00～16:30 講演

講 師：也斯

題 目：「SARSが襲いレスリーが逝く香港を“見る人”」（北京語、通訳あり）

16:30～17:30 討論

コメンテーター：野崎敏（大学院総合文化研究科助教授）

司 会：藤井省三（大学院人文社会系研究科中国語中国文学教授）

場 所：文学部1大教室

参加費：無料

申込先：東京香港文化研究会也斯講演会担当・末岡秘書
E-Mail：maiko.s@f2.dion.ne.jp

Fax：03-5841-3823（中文研究室気付）

世話人 大学院人文社会系研究科教授

藤井省三

（大学院人文社会系研究科・文学部）

第25回 東京大学農学部公開セミナー
科学と市民による生物多様性と生態系の再生

大学院農学生命科学研究科・農学部では、12月20日（土）に第25回農学部公開セミナー「科学と市民による生物多様性と生態系の再生」を開催いたします。

司会 生圏システム学専攻 教授 樋口 廣芳
演題

「21世紀COEプログラム『生物多様性・生態系研究拠点』の意義」

生圏システム学専攻 教授 鷺谷いづみ
「ランドスケープエコロジーから見た生態系の保全・再生」

生圏システム学専攻 教授 武内 和彦
「生物多様性と生態系：共生と再生のためのキーワード」

生圏システム学専攻 教授 鷺谷いづみ
「遺伝子科学と生態系の保全・再生」

海洋研究所 教授 西田 睦

日 時 12月20日（土）13時30分～

場 所 農学部 弥生講堂一条ホール

東京都文京区弥生1-1-1

地下鉄南北線 「東大前」下車 徒歩1分

地下鉄千代田線 「根 津」下車 徒歩7分

対 象 一般（どなたでも参加できます）

定 員 300名（当日先着順）参加無料

問い合わせ先 農学系総務課 広報情報処理掛

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

電話 03-5841-5484, 8179

主 催 大学院農学生命科学研究科・農学部

共 催 海洋研究所

21世紀COEプログラム生物多様性・生態系
再生研究拠点

（大学院農学生命科学研究科・農学部）

第11回身体運動科学シンポジウム

大学院総合文化研究科生命環境科学系身体運動科学グループでは、身体運動科学の研究成果を広く社会に向けて発信するために、毎年、学内教官学生及び学外一般市民を対象とした無料公開シンポジウムを開催しています。本年度は、ヒトという生物の生命活動すなわち生活を構成する活動の原点である「動く」ということを、生命科学、心理学、社会学などの関連研究領域の著名研究者のご協力を得て、多様な角度から考察します。聴講制限はありません、事前登録は不要ですので、当日直接会場へお越し下さい。多くの方のご参加をお待ちしています。

主 催：大学院総合文化研究科生命環境科学系身体運動科学研究室

開催日：11月29日（土）12時50分～17時30分

12：50～13：50 ポスター発表

13：50～17：30 シンポジウム

場 所：駒場キャンパス 数理科学研究科大講義室

問い合わせ先：03-5454-6867(大築立志教授),

-6851(榎屋助手)、-6133、-6134(事務)

関連ページのアドレス:

<http://idaten.c.u-tokyo.ac.jp/sympo.html>

(大学院総合文化研究科・教養学部)



第12回原子力研究総合センターシンポジウム 開催のお知らせ

本シンポジウムは、放射線利用に関わる様々なトピックを題材にしたセッションや当センターの共同利用成果報告等の内容で毎年開催され、今回で第12回を迎えます。

今回のメインセッションでは、来るべき大学組織の再編と原子力研究機関の再編を前に、小宮山宏副学長および大垣眞一郎大学院工学系研究科長から基調講演をいただき、続いて「原子力教育・研究の再編と将来展望」と題したパネル討論会を開催します。大学や原子力関連法人などのパネリストとともに、今後の展開について大いに議論していただきたいと思います。

この他にも昨今の原子力関連の重要な進展を反映したセッションや、当センターを利用される研究グループによる共同利用成果報告ポスターセッション、またセンターの見学会や懇親会も開催いたします。

本年度も例年同様多数の皆様方の御参加、御来聴を心待ちにしております。

会 場：山上会館

参加費：無 料（懇親会：4,000円）

12月11日（木）

大会議室

10：00～15：00 企画セッション

「新しい放射線安全・セキュリティの考え方」

小会議室（201・202会議室）

10：00～14：30 企画セッション

「ヨウ素129を利用した地球環境科学」

15：00～17：00

共同利用成果報告ポスターセッション

見学会 15：30～17：00

懇親会 17：30～19：30 （山上会館）

12月12日（金）（大会議室）

10：30～12：00 基調講演

「法人化後に求められる大学像」

小宮山宏 副学長

「工学系教育の再編について」

大垣眞一郎 大学院工学系研究科長

13：00～15：00 パネル討論会

「原子力教育・研究の再編と将来展望」

15：30～17：00 パネル討論会

「原子力新法人の研究施設共用」

お問い合わせ：原子力研究総合センター重照射管理部門

電話：029-287-8475 email：hit@tokai.t.u-tokyo.ac.jp

（原子力研究総合センター）

東京大学生物生産工学センター国際シンポジウム

「Future Directions for Plant Biotechnology and Environmental Microbiology」

生物生産工学研究センターは、我々人類が直面する食糧、エネルギー、環境等の問題の解決を最終的な目標として、平成15年4月より学内共同利用の研究センターとして再発足しました。これを記念して、以下のようなシンポジウムを開催することとなりました。奮ってご参加ください。

期間：12月12日（金）12:30～16:30

12:30 開会のあいさつ

堀之内末治（生物生産工学研究センター長）

12:35 ホウ素の生物学—植物の研究から明らかになったこと

藤原 徹（生物生産工学研究センター）

12:55 Improving Crops for Agriculture on Marginal Soils: Research into Crop Aluminum Tolerance as an Example

Leon Kochian (Cornell University)

13:40 Metabolites and More - Integration of Transcript and Metabolite Profiling Data

Lothar Willmitzer (Max-Planck Institute of Molecular Plant Physiology)

14:25 植物—微生物相互作用の農業および環境技術への利用と展望

小柳津広志（生物生産工学研究センター）

15:00 ダイオキシン類の分解に関与する酵素の構造と機能

野尻秀昭（生物生産工学研究センター）

15:20 The Structural and Mechanistic Universe of Type III Polyketide Synthases

Joseph P. Noel (The Salk Institute for Biological Studies)

16:05 好熱菌の新規リジン生合成系酵素の機能と構造

西山 真（生物生産工学研究センター）

16:25 閉会のあいさつ

會田勝美（大学院農学生命科学研究科長）

[座長： 米山忠克、五十嵐泰夫、祥雲弘文（大学院農学生命科学研究科）、山根久和（生物生産工学研究センター）]

参加費：無料

開催場所：弥生講堂一条ホール

連絡先：生物生産工学研究センター内

シンポジウム事務局 西山 真

TEL：03-5841-3074

E-mail：umanis@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

≡ 広報委員会 ≡

東京大学の法人化に関するQ & A

東京大学の法人化に関する質問を募集します。

前号（No1274）でもお知らせしたように、学内広報に「東京大学の法人化に関するQ & A」のコーナーを設けることになりました。法人化に関して何か御疑問の点がございましたら、ぜひ質問をお寄せください。

詳細は、下記のとおりです。多くのみなさんからの質問をお待ちしております。

記

募集内容 「東京大学の法人化に関する質問」

募集期間 平成15年11月～平成16年2月末日まで

応募方法 所属、氏名、質問内容、連絡先を必ず記載のうえ、電子メール又はFAXにより広報室あてにご送付ください。なお、質問の掲載については、質問者の氏名を併せて記載いたしますので、匿名希望の方は必ずその旨ご記載ください。

備考 全ての質問にお答えすることができないことも考えられます。その点は、何卒あらかじめご了承ください。

宛先 事務局総務部総務課広報室

内線：22031、82032

FAX：3816-3913

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

（掲載例）

Q： 本学の指定金融機関が「三井住友銀行」に決定したとのことですが、給与の振込銀行は、同銀行に特定されるのですか？

A： 振込銀行を特定することは教職員へのサービスの低下をまねくことから、法人化後も、現行と同様に、全国銀行協会に加盟している金融機関および郵便局とする方針です。

経理部主計課財務企画室が作成したホームページ「法人化における財務会計に関するQ & A」が下記URLに掲載されていますので、ご活用ください。（学外からの閲覧はできません）

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/>

[keiri/zaimu/index.htm](http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/keiri/zaimu/index.htm)

（生物生産工学研究センター）

（広報委員会）

「噴水」「窓」のコーナーにご意見を

「学内広報」には、みなさんから投書を寄せていただく欄として「噴水」、東京大学と社会との連携・協力情報を紹介するための欄として「窓」が設けられています。これらの欄への投書要領は次のとおりです。

「噴水」

- 1 本学における教育・研究活動等に関する意見を述べたものであること。
- 2 個人の投稿で所属・氏名を明記したものであること。
- 3 他者への非難・攻撃を含まないものであること。

「窓」

「東京大学とその周辺地域の歴史」、「学外機関より本学構成員への表彰」、「学外の方からの東京大学に関する意見」など、東京大学と社会との関係に関する情報であること。

以上の要件をそなえるものの中から、広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

送り先 東京大学事務局総務部総務課広報室
内線：22031、82032 FAX：3816-3913
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



「問い合わせ」の問題

大学にいと色々な問い合わせを受ける。私は海の生き物の研究をしているため、中学生や高校生が生き物の調べ方を聞いてきたり、一般の人が海水魚の飼い方を聞いてきたりすることもある。また、意外な問い合わせもある。もう20年ほど前になるが、ある県の警察関係者から被害者の衣服に付いていた「エビと思しき生き物」の同定を依頼された。まるまる1匹の標本だと思って引き受けたところ、持ち込まれた物件はわずか5mm四方ほどのかけらだった。結局、顕微鏡で殻や脚の特徴を調べて、「ヨコエビ」と呼ばれる甲殻類であることが判明した。この情報は事件解決の決定的証拠にはならなかったが、社会との思いがけないつながりを感じ、身の引き締まる思いがしたものである。

問い合わせの中で一番多いのは、新聞、雑誌、テレビなど様々なマスコミ関係者からのものだ。これらの中には取材を受けて良かったと思えるものも少なくないが、残念ながら素直に受け入れがたいものもある。例えば、取材者が明



らかな勉強不足であったり、問い合わせが過度に営利目的であったり、さらに伝えた内容が間違っていて、あるいは故意に歪められて公表される場合さえある。このような苦い経験を経て、昨今は事前に取材目的や内容を聞き放送前に内容を確認したり、場合によっては丁重にお断りしたりもしている。しかし、このようなやりとりは学内のいたるところで日々行われているはずであり、対応に費やされる時間を総計すれば膨大なものになるだろう。

もちろん知の財産を様々な形で社会に発信してゆくことは大学の使命である。その際、いかに社会の必要とする情報を正確に、わかりやすく（できれば面白く）、効率よく、かつ迅速に発信するかが大切である。そのためには、上に述べた「問い合わせ」への対応にしても、部署ごとの柔軟性を持たせつつも組織として統一した指針をもつべきであろう。具体的には、マスコミ・広報対応を一括して行うシステムの整備や知的財産所有権に関わる諸問題の検討なども必要だと思われる。大学法人化に向け、情報発信源としての機能的なシステム作りが望まれる。

（海洋研究所 西田周平）

（淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

◇広報室からのお知らせ

平成15年度「学内広報」の発行日及び原稿締切日を、東京大学のホームページに掲載しました。

URL: <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

〔訂正〕

「学内広報」No.1274（2003.11.12）において一部誤りがありましたので訂正してお詫びします。

1 ページ

（誤）「東京大学稷門賞」受賞式を挙行政→（正）「東京大学稷門賞」授賞式を挙行政

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の上承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No 1275

2003年11月26日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎（3811）3393

e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index-j.html>